志村義雄* シダ植物生態観察雑記 (八)

Y. SHIMURA : Miscellaneous notes on the ecological observation of Pteridophyta in Japan (8)

(17) **ヒカゲワラビの季節型** ヒカゲワラビは関東以西の本州，四国，九州に分布し，一般に樹林下の陰湿な場所に好んで生育し，冬季地上部（葉）が枯死する。すなわち夏緑性[5]のシダである。このシダはすでに報告[5]されているように，薩南諸島の沖永良部島における知名町大津勘の水蓮洞および住吉の昇龍洞（いずれも鐘乳洞）の各入口附近の亜熱帯林の林床下に自生している。筆者および沖利晴（同島在住）の観察によると，このヒカゲワラビは特に12月，1月，2月，3月上旬において，新葉，ソーラスの熟し始めた葉，ソーラスの完熟した葉および胞子の落下した葉など，その種々の発育段階にある葉がみられ，内地（本土）におけるように，冬季地上部（葉）が殆んど一斉に枯死していない。すなわち沖永良部島のヒカゲワラビは夏緑性でなくて常緑性である。このシダの季節型は亜熱帯では常緑性，暖帯では夏緑性になる。

(18) **オクタマシダ，アオガネシダ，トキワシダ，ミサクボシダが同一岩壁に自在す** 静岡県龍山村西川と瀬尻の間，天龍川の流れをせき止て造られた秋葉ダムに流入する河内沢の急峻な一谷間で，北面の岩壁すなわち海抜約400mの樹林下に横たわる高さ5m，巾30m，こけで被われ，イワヒバやヒトツバが点々と着生する一大岩面に，100余株のトキワシダ，20余株のアオガネシダ，数株のオクタマシダとミサクボシダが混生している。恐らくこのような自生地は，日本では珍らしい例であろう。伊藤洋[1]はオクタマシダとアオガネシダはほとんど完全に分布区域を別にすると報告しているが，この河内沢では両種が混生している。筆者[3,4]はこの外，駿河静岡市牛妻森谷沢と遠江佐久間町城西大洞沢でも両種の混生状態を観察している。いずれにしてもこの4種のシダは，同一の環境条件下で生育が可能であることを物語つている。また倉田[2]はミサクボシダがトキワシダとオクタマシダの中間的形態を具えていると述べているので，前記の岩壁にこの3種が自生していることは甚だ興味深い。この河内沢の自生地は黒沢美房が見出したことを付記しておく。

引 用 文 献

1. 伊藤 洋：植物研究雑誌 39：325 1964
2. 倉田 悟：北陸の植物 11：98～101 1963
3. 志村義雄：ヒコビア 4：125～131 1964
4. 志村義雄：北陸の植物 14：62～67 1966
5. 田川基二：原色日本羊歯植物図鑑 1959

Resumé

17. The phenological type of *Diplazium chinense* (BAK.) C. CHR. is ordinarily

*静岡大学教育学部生物学教室 Biological Institute, Faculty of Education, Shizuoka University

summer green in Japan proper. However, the species is found ever green in Okinoerabu island, Ryukyu Archipelago.

Thus, the phenological type of the species is summer green in the warm temperate zone and is ever green in the subtropical zone.

18. *Asplenium pseudo-wilfordii*, *A. wilfordii*, *A. pseudo-wilfordii* var. *iidanum* and *A. Yoshinagae* grow all together on rocky cliff, intermingled with mosses, in some valley of Kochizawa, Tatsuyamamura, Totomi Province.

While ITO reported that the area of distribution of *A. wilfordii* differs from that of *A. pseudo-wilfordii*, the two species grow on the same cliff in Kochizawa. Furthermore, I have observed the same case both in Shizuoka City, Suruga Province and Sakumacho, Totomi Province.

It may be said that the four taxa mentioned above grow with the same range of distribution.